

野居鷹義八

3038
3



宣

川平儀

本定

吾形者數
之所不
能分
也
不
可
若
其
之
所
不
能
窮



宣和文庫

由利卷之三

行
之
所
不
能
窮
也
不
可
若
其
之
所
不
能
窮

由利稚野居鷹巻之三

万亭 叟馬 戯編

○ 尺先逢良医巨則冠者弒撫子君

此所小城下よりは五六里餘りも隔たりし山里の頃も秋
そよめつた。秋の上風おとびれり。暑さは去兼と
田の面を通く溝川の水上は瀬切て里の童どもは浅津にお中
魚取とりて打群あそびける中一疋の水虎何地よりあがり
此のぞもに交り魚取取け打らひおどして餘念けれさ
かりけれ里人ホえ付中一悪と畜生かき年頃らの川から

ふく入派残ふをまゆみおそつめ。今日も斯ら交りてあ
然。童どもは曳りて己が餌食とかなん結講ごらんう物
みつせと。鉞鉄かんと在合りの引らび大勢一度お打と掛
目。水虎と大死ふおとほひ堤の上へのけ揚るとをがけ
この地籠亂抗おはられ。あふはあふの水おんとすれども
あつたせりたれを身をかくとて深もよし。あつたせり
こらへ走りの段蘆一村おびりたれを頼みお隠し。知れ道は
お小じとけり。に打まうに頭おいさけ雷鉢とる名づけし四
がれ所もららそと。今息も絶ぐあれ。あつたは空に死

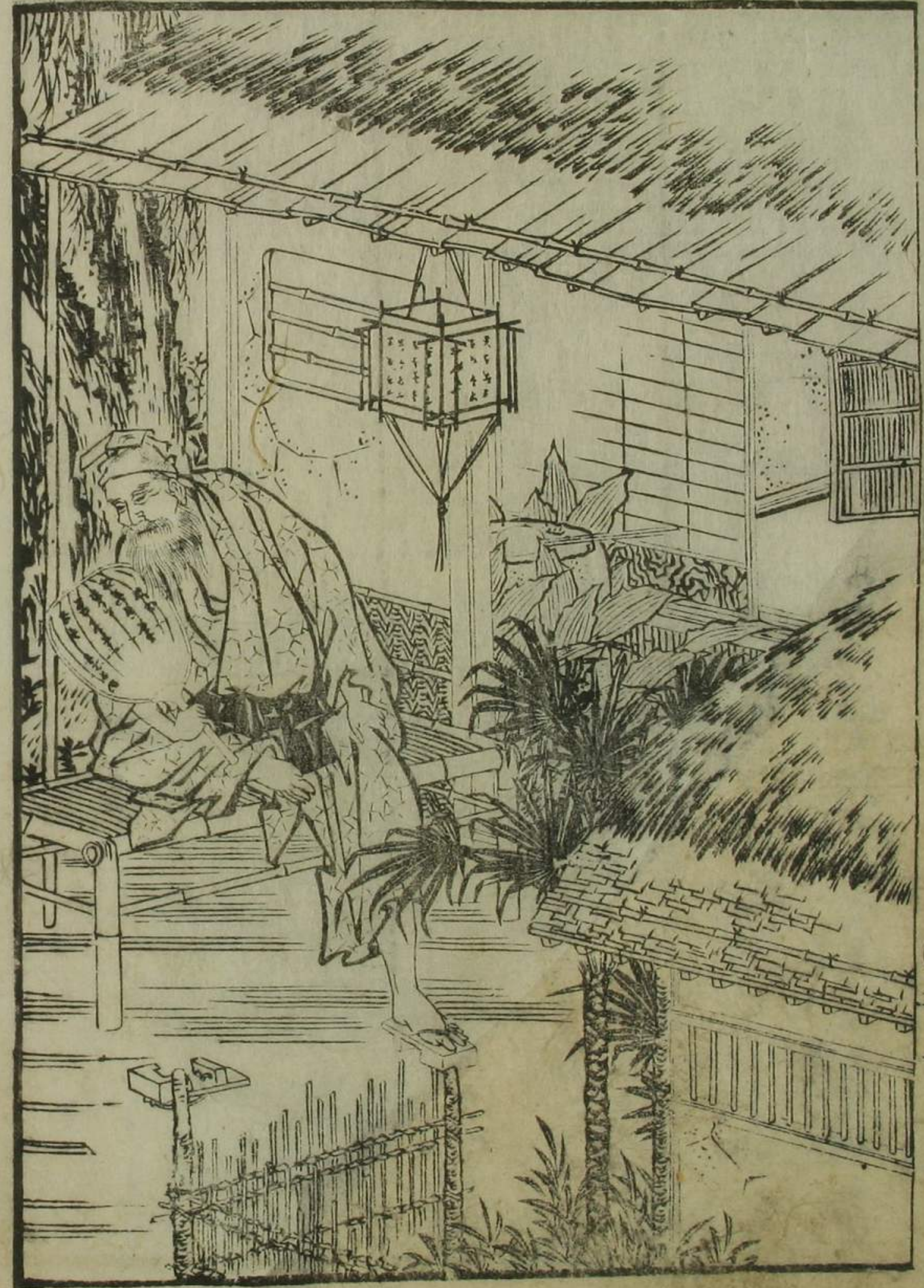
子れりものを終らてやとて手足器骨も打ひしむかかり母ら
 けりて終ふ打殺しけり面くしとて先畜生めは行付とて
 童どもも母怪我のかりしとて産神の助かり。いざ日もくれば
 帰らんとけりめ。一人言中村ぐれの医師悦齋公羽五の
 水虎の亡骸をとあらせん傳とて医の家より牛渡馬勃も貯
 めておくや。是も何ぞの用お立ほりた物母もあててとて總とを
 ては一荷ひ彼医師を音便り。抑この悦齋とてはえし医師の
 著りし頃より所々に遊歴して。よくかぶ董奉が行状を
 みる人の爲に病を療む終ふ治せとていふ事なし其治

され者厚く礼謝せんとすれども且くひらも受てて
 一株の桃を植させけり年積りて此庵近に死邊りには桃
 の林成るとも不至り。扱その實れ熟とて待て街に桃を
 建り桃を買んとし者あは自ら取りて桃を取返し正
 小一荷の桃をひ百錢を樹下におくばしと書付たれ。是
 瓜する者その價れすくなれを喜ひ年ひ取りて桃取ると是
 を市小賣らるひを根てみ桃取むとば我者めれば救足の様あり
 て其人小疵けく。あやはらめたしれ病其疵おのぼく人思は
 かや。悦齋とて桃の價樹下におくばりて是瓜藥種小かく



あつらいの
脱神水虎の
死ふいふと
故

由利岩卷之三



餘りあれど近隣の貧乏者も施しければ受け取る者も
徒ら稱せざといふ事はし。されば此者どもは何ぞ好悦齋に勤
めたる心よりかたむすども庵へ贈りつけられ也悦齋の村の
どもグ氷虎の亡骸を持ちあり菴の臺所へは置き置て帰るを
氣持するゆゑと打笑ひ蚊や折之る窓を寄るひ松や風
小残れあつた忘れひより義皇の人とほりけ。夜更に
涼み居られぬ臺所ふらめかたむす声のすえられ故紙獨し
て是かえれば此氷虎息を返し。いづふ動かんとすれども
強く打りて身軀吐つて。借悦齋に仰せんとく血の流

とほ。まると合せられ形相のこそ言ふ骨砕け筋を
あやう呉よと頼むさほつればいと不便なとひ汝を
害せ。悪行積りて今人の爲ふかたむすはとりけ。我汝若し
みの甚じれをえられおのびと幸ひふ我家骨を継肉に綴る
の方あり正汝が病といやまんよて五分の熨八減の齋公を用ひ
といふ事おれど。夜も曙なんとなす我頃ハ手足少く動いていと
けね氷虎が舐人目おのらば又もや辛れ目み達りやせん。其日
と一日庵の床に下へ隠しおれ。ひそくお食をゆえ。日暮ぬれど
門を固く薬湯を以て是か蒸と救度曉おあやうで氣力殆

ほしけれ。悦舟色と正しりて氷鹿に向ひ。如何なる後か。た
畜生とてども。ほしりけり。今日再生の恩。以て忘る。しりけり。た
以来か。人々を溺れし。うれし。是れ。お教誨。し。ひきよ近
川へ放ちり。實公の畜生も。悦舟が深恩。も感。し。らん。お
てより。後悦齋が朝毎。誰が。りて。し。もの。お。鮮魚を厨。あ。ど
は。置け。悦齋も。始の。疑ひ。お。扱。氷鹿。め。は。業。よ。る。
殊勝。る。者。う。お。心の。肉。お。憐。れ。悦齋。の。ひ。と。ら。佛道。お。
と。寄。せ。常。お。精進の。身。お。れば。是。は。欲。を。お。め。ね。ども。彼。が
志。滅。いる。み。も。お。と。打。過。けれ。お。或。日。附。伽。棚。清。ら。お。取。り。ま。さ。ひ。

仏へも。お。た。お。器の中へ。の。間。あ。う。例。の。ご。と。二。正。の。小。魚。を
お。れ。お。ぬ。悦齋。へ。夫。も。お。ぬ。擦。摘。香。の。ゆ。せ。と。向。物。せん
と。器。お。ぬ。お。魚。の。り。けれ。お。た。お。驚。を。お。勿。躰。か。や。是。ぞ
我。の。や。ゆ。り。かり。と。て。硯。ひ。と。お。今。日。より。して。後。魚。の。受。ま。し。た。ぞ。
志。の。ほ。く。感。お。は。し。書。付。川。水。お。投。下。けれ。より。後。其。の。も。止
けれ。お。か。や。今。の。世。も。水。鹿。骨。繼。の。薬。と。言。傳。く。わ。ん。氷。鹿。が。教
と。ら。お。は。あ。ぬ。悦。神。が。氷。鹿。を。療。治。る。世。遣。方。な。り。と。て。扱。し。と
差。羽。六。郎。の。盜。賊。の。汚。名。と。蒙。り。僅。お。命。お。存。さ。れ。し。へ。も。罪。罰
鞭。骨。を。碎。れ。肉。を。破。り。身。心。も。お。安。く。と。お。稍。く。所。縁。の。方。お。は。を



ふとほしう悦齋の医術の名高きゆゑ兼くすけつゝされりまれば
菴に訪て療治を受し母日わんじて筋のひ骨もろり勇氣昔
不倍しければ大とふよほこびつぐりあま家臣多く別府が權
まおそれ忠義を忘る者半ふとこれ幼少の御身の上危なる
且夕おありと明暮心死しめしぐさ川と公府縁たのぞ一先何とへ
なりとも御供しし時を以て譜代恩觀の輩がうらへ別府兄弟
と亡とて下と計次をふめ雨風烈し夜おほせられて忍び入若君を
誘引せり御館に立退けり。借由利の家ゆへ縁九殿何國へも
かく跡がかりしひ後へのの證を隠し頼に近習外様の差別

ゆゑ五更小燈をさえて破窓の雨に向ひ中流小舟を失ふて一瓢の
浪小漂へれども云々をたむかひて庄司が政道の正一かゝるる孤
れ心のれ軍へ他邦に離散されども又其中に馬蹄塵埃を握
柄の門に媚を求められ族も多かりければ別府が威勢自おりく不日
はして其家を奪んととれ氣に既小現とければ世子の方へ泣
らば泣明し此頃への狂いれ斗り伏沈とあひしが夫お別れ子
を失ひ今何を樂しみ長く浮世に存生するもあはれと去りて
流石都の意しければ何とぞ一平が故郷小帰りし後故殿のまづみ
あひゆる長門とやらんの海の底小まづと果せんとそ本意あめ

思ひ定め年頃馴仕ぬ伏衣といふ女房小かこらふ此女房の
甲斐一見者して由利の家重代の太刀守の面影と号し一ツの魂
古く付えし寶がねは是を携へむそか小籠と思ひ出させしり先
巴里が里ふ二日三日が程の隠居居て旅の用意ありは調へ市女
笠小く打傾けつや将衣束小次女と畧し奉り供中に出掛け
そこ衣とあるはばうりの急げとも馴ね旅路を行なふ三杖が力不
たより行頃ハ神無月半の空木のまゝ寂々その山嵐をけく
吹てあせだ兼々夜の襖旅の舎に日を重ねやめく上野に
國あぞはきよひみひる。あつ時ハ美景ふよりて花のりこに

帰れりみん忘れ又ハ酒を煖めて紅きふ林折おれされは遊
呂かりその物の語おも興をよせ車以廻らし多ひ一才の今日日
伏衣ひとり力草小此とらぬやどたどりあひめれども救日の疲
小艸跬ハしづく血よそみ。いとも瘦とまつれ形相あり。かる近
れ母一げがた世の中ハ誰誠よりさられそめて。一声の雨むま
そだ遠寺の鍾小頭とめぐらせは千仞の青壁我々として。え
小眼もられ魂さへしれ山道おれハ教片の紅纒小のこれる木の
りとも休らひほく主従涙ふらう折らら道もあれかなんかの山石
根を踏む。何國よりうまのけん頬骨高く一荒あれて眼さ

さうしくち。歳のむごのハサのゆりあもあんと覚ゆる大男。二人
のりの狐宛目ふかけて。稍ハ。くたあひし。かうふ女房達わりの
小癩とあふ神の勞いしくおはゆるや。其荷物へ我ホムはくせ
あへ背小肩と何國までも送り系とせんといふやうに伏衣が肩
おそく包ふまをかき奪んとす。此方ハ怖と中くしらんかとも
まられハ先欺いて中々我ハ此麓の里人なるが山寺小預けお
めれ兒の此やういほり便宜の遠じれゆえ愛熟の顔えん爲
不行先をいそめれハ今少一の道のほどはしや勞のれも苦
かふといざはせよへと担子の方小信と眼くせして立んとすれを

曲者も坂東声とり揚ぐ。やれ和めら兒あもせよ法師も
いそせ便宜せんといはさもあつたあれ此旅擔ハ我ホ暫一のうら
あつりやとぞ。猿のぶと腕を延。奪りんとすれをこゝ狼籍と
取けりども。とや裏物へらび取り取。已が懐へ捨込り斯くの景
と伏衣の用意の劍抜とほ。電光の如く切付。が餘りぬい。かつ
岩角ふ打つけ。運の極めの悲し。と鏝えよりほり兒と折。二ッなり
く飛散とば。くは惜と刀投とて追つけども甲斐。うら女の小
を面倒なりと拂退伏衣がよめめ。所が足をこつせ。逆の谷へ
落たり。兩岸の巖とにさ。鋒刃削。迅雷幽小響。ひ

瀑布ふるまゝと洛進る雪は千筋の氷柱と嘆む刀劍地獄の
 ありさ後も眼の前ふえて不便なり。北の方のあつてもあつれど
 寂前の劍光よ袖打覆ひ多つれ情々の振舞や其の
 こそ身もかたがた室ぞやと取れば多めは曲者の物をも
 のけけり取る引よせなり。花よりも妙小雲よりも清らうね
 御胸元と玉ちれた斗の刃及びめて美買ひつへあつて魂ふる声と
 ともに岩間おとるは浮氷血は流れて下行水に紅葉を
 導く。強盗とて向もやと撫子の着もつれ御小袖つて山刀
 の鮮血お拭ひ。小謳唱めて跡はくはるひり。爰ふ上野れ酒



妙義大権現の跡垂はと御山よりの其程十町のり北に當
 了。人倫ゆえつれ谷陰に居を據へ差羽六郎忠先幼君と神佐
 那義を唱つ輩が招れ交を結び何卒別府兄弟等とて
 國家が泰山の安んおんと計ぬめづし。あがくははむと
 ありぬ山賊の張本と形しお折柄初冬の季にれが往來は旅
 客もたえが形ふよう。屬下の如原手は空くこの山中ふ年
 次越人も詮つれ業ありとて已くが便と求めて此前ハ洛の方又
 へ人里多つ邊り大半は離散はじたりしが。其中小巨則の冠者
 名をふとれ癡者やうの所お止せりしが。年おひつらの裏



由利岩塔之三



物取持の外面より、笑顔して。六郎が前より。此頃、断
てよ。仕合も形く。酒も替る代に、さしかりし。今日、さ
も麓の九折、あてい。かの頼成、おたり。いふ首領、僕が土産、
えく悪び形、鬚面、微く笑ひ、沢儲多と。あつり、お差出
けを。六郎、手取く、えね、正は金、形、おは、九二、三百、金、
も、ゆん、んと、あ、包、る、れ、ば、あ、ま、り、に、冠、者、う、ま、か、
を、解、た、箱、と、用、ひ、し、是、を、入、る、に、豈、ど、ろ、ん、一、面、の、
六郎、打、返、し、く、飽、眼、も、せ、と、守、了、居、り、し、が、眉、
お、食、い、所、其、は、い、う、か、れ、旅、人、の、擔、物、
は、して、九、幾、許、の、人

救なれや。又、汝、不、知、さ、れ、て、後、其、人、何、
旅、装、と、あ、ら、中、の、姿、な、り、ぞ、と、事、あ、り、け、
お、け、れ、旅、人、と、い、ふ、ふ、兩、人、の、婦、人、
し、何、は、田、舎、人、の、物、と、あ、り、す、れ、
お、弁、声、を、ひ、や、ご、と、な、死、人、の、世、
者、も、さ、一、女、の、み、お、け、く、人、は、
命、は、た、ま、け、得、さ、せ、ん、と、お、ひ、
て、及、向、あ、え、止、り、お、い、と、谷、
殺、し、ぬ、通、も、い、の、ら、取、な、
は、最、初、よ、り、衣、裳、手、
も、刺、取、

小衣類いらいのわきりに血ち小染こぞ故ゆゑ其得そのま打捨うちすて命奪いのちをひ取とひ裏うらも
金かねとのとどひひ無益むやくの硯いん一ひとつみれればばめめけけるる廣言ひろげ述のたま比ひ面めん
顔かほ赤あかめてめてけけれれみみ太お郎ら茫然まうぜんとしてして大息おほいきけけれれ我われ共ども
旅人りょじん小こここそそかかりりととおおれれ子こ細こああればれば汝なんぢとと共とも不ふ彼所かたへへ立た越こへへしし葉あは
内うちせせよよととてて冠者かんしやとと先ま立たせせ遙々とほざかの岨道さかみちにに攀よ攀よてていいろろととええれれふ
無慙むざんななかかるる撫子なでこの方かた冠者かんしやがが鳥とり心こころりりとと刺さ貫くわんかかれれろろううぬぬくく
伏ふ多たれれはは傳つたへへ馬うま嵬が原の夕部ゆふべの露つゆとと消き失え彼王環かみまがわんの面おもて
影かげもも斯ごとややととああららばばろろううななれればばにに武ぶれれ差羽さしう太お郎らもも勇ゆう氣きらら
志こころにに甲斐かひがが死し骸がは抱かかりり上あげげ落おちち涙なみだとと雨あめののああとと十じゅう方ほうとと失なひひ

ああららばば一ひと黙然もくねんとと坐まりりししかか押肌おしまためめ死してて刀や拔ぬれれ已ま不ふ腹はら突つ立たんんとと
ととれれとと巨剛ここのの冠者かんしや抱かかりりととああのの如ごと何いるる振ふる舞まををおおししとと狂きやう氣き
むむしし志こころああかかとと刀や持もてて小取ことり対たいてて離はなれればば大郎おほらう涙なみだがが拭ぬききしし声こゑ打う
ぬぬるるひひややけけれれとと汝なんぢ子こ細こみみああららばば我われ生な害がいをを止とめめららせせよよとといいふふははとと
おおががらら今いまとと何なにをを包かひひぐぐれれ我われここそそ出羽でつの國くにの押領使おしりやうし由利ゆり家け
譜代ふだいの臣おん差羽さしう六郎むつらう忠先ちゆせんとといいふふ者ものなりなり逆臣さかじん別府べつぷ庄司じやうじとといいふふ者ものの
爲ため小幼君こわらぎみの御命おんのみこと危あやししとと以もてて救すくひひ奉ほうりり竊ひそかにかに供たままにに生な國羽くにう加か
立退たてひ今いま此こゝ山やま中なか小守こまもり護ごははししとといいふふ汝等なんぢらとと共とも小義こぎとと結むすびび當あたりり
從したが一折ひとしやうををむむとと逆臣さかじん別府べつぷ兄弟あに等ら死しんんととああららばば公こう止とめめららせせ然しかららしし

先づ我もふ一品と正しく由利の家へ傳つた面影と
硯をれど此重筈が携へておられ旅人こそ不審なれば則ち
了て亡骸がえなされば心とおろくも主人由利維の北の方控ま
君母もほそとや汝のあはれ事なれば罪がせしめ以所は
忠義の爲とほ言ながら山賊を以て世渡とせし己が罪おのれ
責を某が非道天通終めいじらむと六郎忠先が寂期時
至れり介錯せよと取立と刀がさぐさば奪ひ取何のいん
巨則の冠者已う腹小突立と引廻し腸斤手小振かし若しけ
る息とげれ實や佛因果が説てめられ車お北の

抑我稚きより此山中み育つといふも素性を元来足下の今
語りもふ由利の家の執權別府判官が忘と形身はしと庄司
元押二郎起縄兩人の爲めは別腹の身おてけりや判官存生
の時我母が寵愛おとさりし本妻の妬げよれおよりて腰胎
の身おいさかの縁を求め此國お嫁せしめ我が産く母を
日おして身退りぬ其後我十三歳の長養父も死しより
孤と形り明暮山野お獵して是を里人お賣代はし一飯の助と
せしがいつの途あつ猿も力量強勢も欺て終り山賊と形るとい
ども我志願と出羽お立越父の亡跡をも訪りんとおりぬ

足下出羽の國の産され由り。さて社深く交りを結び。然るに我兄二人が。おやけなれ企及は。其君を亡して代り。厚恩を忘れ我。不慮北の方を。獄に墮し。浮ひ耐わ。鬼に欺く巨則の冠者。義心の獄。過去に因縁ふより。我兄身五逆の罪人と。獄に墮し。浮ひ耐わ。鬼に欺く巨則の冠者。義心の獄。よ。差羽六郎も。正念不終を。忠先我且。い。主君の御爲。仇を報。兄とい。も。汚。死。通賊。も。死。亡。す。

よ。外他事。足下宜。幼君を補佐。時。日。度。怒。一。度。と。秋。ひ。て。忽。然。息。な。え。り。れ。そ。衣。ひ。れ。扱。こ。そ。最。期。一。言。違。ふ。と。幽。魂。西。海。に。去。て。石。を。風。と。り。由。利。稚。殿。を。再。度。帰。嶋。な。じ。め。は。死。し。て。後。止。む。忠。心。の。事。

○ 伏衣異人授寶劍

叔又伏衣。千尋の溪の底。小蹴落され。氣を絶。け。岩間。の。顔。小。掛。り。と。れ。め。忽。然。正。氣。つ。た。け。と。も。更。ふ。この。世。も。覺。え。ね。ば。奈。が。へ。眼。を。くら。座。を。見。て。

けりぐくひ廻りてふ我身をばしり推子の方の供中上
 の國の山路をゆく踏迷ひ盜賊を討んとして返つて此谷におら
 入る幸ひ一滴の水も九死を出一生を返るのみかたは
 不路那が身一寸の疵なき子寔に神の加護あるに
 我身急なれば上りては壁千丈の絶壁といやも何卒して攀
 登りいうゆもして再度主人の先途をえ届せんがあはれ
 木の根を取れば藤蔓と結び這登らんとあせれども山雪蒼蒼と
 して日月の光も隔たれ谷のうら巖はなまが屏風を建
 くれが何をもそりもそりてやもなまが公のやうにふと止

ども計極り術はれた十方ふるばりなり前ハ乱流矢を射
 ごとく逆浪石がまらじ越んとて渡りかたればとやせん
 かやせんと散歩めれ此方の峽おそめて一株の栢木倒れ月
 橋となりワれをえつけ是を踏んぞ渡るとすれば戦々恐々と
 きて眼眩め足えぬひめり幸ふして這渡り稍く向ふ乃
 岸に至るとや猪道といふ所のやわん岨にたれ岩の端向
 羊腸として一筋の徑路の落葉も埋まれば在るればと行先
 と定めぬも此路をたどりく五六町も越行べしつと日暮
 て振四方ふ吠物凄まじりうん方は頃も初冬未だ寒

氣をさうり小肌を浸し氣力身筋より小疲とめれば今と一足も
引く社つとどわる木の根小腰をけてまじし勞を厭折らるる
踏立く大の狼眼の光と明星の工く伏衣を脱く立りし何ぞ
けん又りとの岩陰へ退るぬ狼へ牝牡常小睦まじりたりのこと
共もありて我を喰ひぬや我幸ひ一度生れむとりんども
道も形此谷合結ふ夜更く前路を弁と何と今宵月の中
悪獸の餌食となれぬめと観念し日頃を志しむる大慈大悲の
尊号唱へけれぬ遙向ふ小灯の光木の間を漏りしげん不
思議やひれ谷陰も控佳人のありけれが流石命のつれなき

て斗く岩根踏ぐ灯のりれ方と志たれぬ少しひけられぬ
到るぬつとつとぬ石を登れぬの艸の菴あり救株の老
めぐつて枝を垂れ青苔拂いぬれどもおのぼく塵なく正小壺中の
天地ともいふ先の灯の影はまろく此所ありけりといふまは
と頃て衡門小近づき安内を乞ども誰あつて暮らる者もなく
溪水の潺々々々音のみなれが半ひけられ竹の編戸を押し
入るる一人の老翁前小一蹄の机をおさる香を焚て閑坐し
くはは額小顔水の波をたぐし鬢小高山の霜をくぐりその風
情殆凡あつげれ伏衣の庭上小ひさほつれ安母の盜賊の鳥も此



伏衣幽谷
天狗道
苦しみとる

由利巻之三



溪小落入り。この處まで迷ひ入りてかたじけなくもさるる所を
竹のぬき衣と頼りて尊翁なまけ多くと涙も呉くやけり
完雨としてのはやく。ぬけぬや汝盜賊の爲に十丈の底小落
とくも敢て身許を残さず一滴の甘露露降して一命と全せし
山中悪獸の難をさけられた。そも何の因縁とれと云ふや
哉これ圓通大士汝が忠義の志が憐み多し或在須弥峰爲
所推墮念彼觀音力如日虚空住の誓言空一かばれば以所
なり。さのみやふ仏恩を謝しなれとありは伏衣愕然とし
初めて夢の是とてごとくおぼえられ常小肌身離され中

袋を解く本國慈現寺の觀世音菩薩の御影に拜し
とへ勿務なや尊容とく裂蓮のうてお御後の光ももそこ
涙もれやあま拜と多くと餘りの有かごとく佛恩の空を
感涙もぞ咽びけれ老翁かよひて日ひたれは芽屋りとして一椀
の胡麻一壺の醬油。去ながら是を以て汝が飢れたさくとし
とて。各自一ツの菓多しひけしは伏衣お戴たは是は汝が
其味美ししてたうかれおは。喰ひおられは忽ち一才暖か
生し飢れを忘れけれは再拜して厚恩に謝し。とも翁は
何なる人不在して我危難を察し大悲の恵を蒙りて

を教あつるやと尋ねられた翁は考つていへど又香を焼く
待顔不在しゆと振かねば伏衣も欄ふ縁のて口の中も香
門品を讀誦しければ預刻ありて翁伏衣は向ひ障の月鏡ふ
登りんとて草堂四五輩の客あつては其所のありし
の家は再度興つて吉兆をのこしめ悟るべしと有けり
唯々として庵の行隅ふ讀じては御經と念どけ居され
忽林間一陳の風起りて村雲在明の月が覆ふとつては室中
あじ氣蒸霧閉つれば眼をどめて坐間並居る人々を窺
えれば香の衣ふ水晶の珠教とほまがり又ハ金作の太刀と風

壺中すまかけ掛されあり何とも眼の光日月の如く左右れ
眼より長と翅生れ出くおろしおんといふ方は主の翁も馬齒
鳥足の袋袋とかけ悠然として主客の坐已み定まり一揖の礼
終りて後一人銀の銚子小金の盃とり添進し出れへ上坐の客
僧是をえて三度かこひけ次第く小飲終りて差も眞のれ氣
色もあがりしう良わりて同時はつと喚ぶ声あければ黒烟り立
岡絶僻地とれる半時はうほして皆火小入夏の虫れこくはし
こそ實天狗道のくしみ焚鉄の丸うせを吞といひて是なんめり
其後あつて有く皆大息ほきて本の如く座小直りまひ

一人の客僧のいづく。往一頃若狭の前司恭村嗚呼の攀動の
て我がが由に慰し慰し出るぬと心ひふ須更の間ふむびくを
便なられ其後の天下時頼禪門が往ふくし京鎌倉のいれも
なり。四海静謐にして國々の諸候の家よ至れ迄障化るる
やふよりなり。何どの所ふる身孤よせ由く誦樂みぬるさざ
のふふそ未座より一人進出けく此の羽州由利の家
老臣別府庄司元押已が主人の其家孤奪ひ専ら奢心ふ
ぬよくばるるいをも引出て結搦のはのれ一人の女と語ひ
彼が魂をどうかし我が寄所とぬれば胎真に添ふがごとく。或の

に備とねして物語とは各々ひを合し猶雑談數刻ふ及び
どつと落るれ暴風小寒林一度小動揺して今中でのりほく人の
形影のどく消失ければ主の翁のみ柱小流みて罔然と居し手よ一
振の太刀孤携へ伏衣と召出。如何不此劍をのりやと給ふれば
押戴とよくくつるれは豈思ふ先盗賊を討んじて過る
打折るれ由利の家重代の劍をれば且驚と目怪しみ公明小同
ていつく此劍こそ伴妻盜賊を討んじて打折岨道ふて失ふる
劍をば今一点の疵なく吹毛の徳巖然とれ何れも不審よの
とすければ公羽のいづく汝知るんや仁徳天皇の御代百濟國より

系り仕えし酒の君といふ者あり。天皇の四十三年百舌鳥野の
狩の時諸鳥苗を啄み穂と拾ひ。田畠小害のれを除去し酒の
鷹が居く鳥とされ是日本鷹狩のこゝなり。此人百濟國を
帯て渡りし一振の劔長く此國小とほりて。今由利の家は實
とかり。由利稚秘藏の餘り。三ノ頭上京の折かゝり此劔を
故郷小残し秘め置しふり。其身終小逆臣のこゝめ。他邦に
零落し。家正母傾んとされふり。劔も又徳と失ひ一度折
たりといふも。通力を以て全ふはし。我形が中心をさめて名劔の
威徳と添ぞれど。本年花盛の節小到り。主人由利稚小聚

遠く此大かみまんとて。小前次をたれ。酒の二言は
心中小驚馬に。主君今は此世小亡人とのこひ。あ。年春二
て。見ゆれ事ありんとは。實頼り。れ教うね。神愛乃言
舞うづらびと心そ。海女悦び。重経て。けれ。我んか。ども仙
翁の扶成。ほ。に。さ。ひ。一劔。人。下。し。ま。れ。こ。と。身。と。粉。め。磁
くとも謝を。れ。小。足。る。づ。か。ん。ま。ね。が。ら。主。人。の。先。途。を。り。く。ら。ん。
最早鶏明。小。や。ど。り。れ。は。念。と。伊。暇。な。り。り。一。刻。も。早。く。へ。郷
近。た。方。へ。い。そ。れ。と。ひ。と。別。と。告。げ。れ。公。頼。志。也。て。曰。く。が。れ。申
東西も弁(か)さる。れ。は。汝が忠義の志。母愛一ツの枝折と授く。

由利若卷之三

